

期待の表明がモチベーションに与える影響

1721223 廣瀬亮太

Key words: 内発的動機づけ、ピグマリオン効果

目的

人々が自ら物事に取り組む際の理由や要因は一般的に動機づけやモチベーションと呼ばれており、特に、内発的な動機づけに関しては、外部からの期待により個人の動機づけを促進させるピグマリオン効果 (Rosenthal & Jacobson, 1964) や、それを応用したピグマリオンマネジメント (Eden, 1990) など多くの研究が蓄積されている。本研究では、外部からの期待という要因に焦点を当て、他者からの期待の表明が受け手のモチベーション及び二者関係に与える影響について検討する。

方法

手続き 調査は2018年6月中旬に、講義時間内に質問紙調査法を用いて行った。参加者は大分大学の学生119名(男性63名、女性56名)、平均年齢19.18歳 ($SD=1.12$) であった。

質問票 回答者は個人属性、大学生用学習動機づけ尺度 (岡田・中谷, 2006) の10項目 (シナリオの前後で収集)、日本版 State Social Paranoia 尺度 (森本, 2015) の20項目に回答した。シナリオは、好意条件 (好き・嫌い) と表明語句条件 (期待・悪意・統制) をそれぞれ対応させた6種類を作成し、シナリオ場面におけるモチベーション及び発話者へのイメージについて回答してもらった。

結果

尺度の分析 日本版 State Social Paranoia 尺度において、先行研究と同様の因子構造を仮定し α 係数を算出したところ、十分な信頼を得られたため (恐怖感情 $\alpha=.95$, 親しみ感情 $\alpha=.88$, 無関心 $\alpha=.79$)、平均値で尺度得点を算出した。大学生用学習動機尺度の10項目において、事前に内発的動機づけと外発的動機づけの2つに分類した5項目で、それぞれ α 係数を求めた。すると内発的動機づけに関して、シナリオ提示前は $\alpha=.83$, シナリオ提示後は $\alpha=.71$ の値が得られた。十分に高い信頼性が得られたため、平均値でそれぞれ尺度得点を算出した。

3 要因分散分析 内発的動機づけ (前・後) を従属変数、好意条件及び表明語句を独立変数とした3要因分散分析を行った。好意条件の主効果を確認した

ところ、シナリオ提示前後の内発的動機づけ ($F(1, 111)=0.52$, $\eta^2=.01$, $n.s.$) は主効果が見られなかったが、表明語句条件の主効果を確認したところ、シナリオ提示前後の内発的動機づけの主効果が認められた ($F(2, 111)=5.84$, $\eta^2=.09$, $p<.01$)。悪意の表明語句 ($M=3.31$, $SD=0.13$) を与えられた場合、統制の表明語句 ($M=2.68$, $SD=0.14$) より提示前後の内発的動機づけが高くなることが示された。

2 要因分散分析 親しみ感情、恐怖感情、無関心を従属変数、好意条件、表明語句を独立変数とした2要因分散分析を行った。表明語句の主効果を確認したところ、恐怖感情において ($F(2, 113)=72.60$, $\eta^2=.56$, $p<.01$) 主効果が認められた。悪意の表明語句を与えられた場合に、恐怖感情 ($M=2.91$, $SD=0.10$) が高くなり、親しみ感情 ($M=2.17$, $SD=0.11$) が小さくなることが示された (Figure1)。

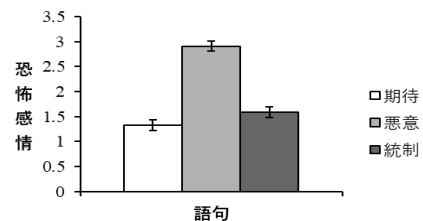


Figure1 表明語句による恐怖感情への影響
考察

本研究では期待及び悪意の表明語句がモチベーションの向上を促進させることが示され、また、悪意の表明語句は印象形成に負の影響を与えることが明らかとなった。それと同時に教員への好ましさは内発的動機づけに影響を及ぼさないことが明らかとなった。シナリオでの教員との関係は好意のみで示されていたため、内発的動機づけを促すまでの関係性に至らなかったと考えられる。今後は、実際に尊敬する人物を連想させるなどシナリオの詳細な設定が必要となるだろう。

引用文献

Tierney, Farmer (2004) The Pygmalion process and employee creativity, *Journal of Management*, 30, 413-432.

本研究は、井川ゼミナール演習IIIにおいて、大分大学経済学部の井川純一氏が2018年に行った調査データを再分析し、修正加筆したものである。